令和7年3月14日
八王子市立加住小中学校
校長 小川 博文

令和6年度 八王子市立加住小中学校 学校経営報告書

令和5年度の学校経営では、昨年度までの反省を踏まえ、「安全で安心して楽しく学ぶ学校」を掲げた。そして、令和6年度の学校経営では「安全で安心して学び、一人一人が活躍できる学校」を掲げた。学校全体が落ち着きを取り戻したことで、子どもたちの自己肯定感、自己有用感を育む学校教育を行っていく必要があると考えた。さらに今年度は「豊かな人間性と社会性の育成」、「学力向上」、「小中一体化」に加え、「GIGAスクール構想」の4つを学校経営方針の大きな柱とした。

昨年度と同様、特別支援教育の視点に立った教育活動を推進させ、一人一人の児童・生徒に寄り添うことを大切に個に応じた指導を行ってきた。児童会・生徒会活動における自治的活動を推進させたことによって、自己指導能力の育成につなげることができた。校内研究の推進、教員の自己研鑽、日常的なOJTの実施等により、授業改善に努めることができた。

小中一体化については、今年度は新たに小学部1年生から中学部3年生による学習発表会を実施し、児童、生徒、教職員が協働して取り組んだことにより、小中一体化を推進させることができた。

学校運営協議会では、学校の現状を共有し、学校として取り組むべき課題を確認してきた。また、学校運営協議会の委員によって、児童・生徒が参加できる地域との交流の機会を作ることができた。今年度は昨年度と比べ、地域行事に多くの児童・生徒そして教職員が参加することができた。

(1) 豊かな人間性と社会性の育成 80%

①人権教育の推進

授業評価アンケートでは、昨年度と比べ、教員の不適切な指導による内容が減少した。しかし、校長のリーダーシップのもと、十分に教職員の人権意識を高めることができていない現状がある。一方で、多くの教職員が児童・生徒への声かけ等において人権に配慮し、丁寧に指導することができている。次年度に向けて、教職員の人権意識を高め、教育活動を行うことができるようにしていく。

②特別支援教育の視点に立った教育活動の推進

週に1回、小学部校内委員会、中学部校内委員会を開き、児童・生徒の情報共有および今後の指導方法等を検討し、共通理解、共通指導に活かすことができた。また、特別支援学級未来塾と通常学級との連携を密に行い、一人一人の児童・生徒に対して個に応じた丁寧な指導を行うことができた。特別支援教育に関する校内研修を4回行い、障害理解教育を深めることができた。

③生活指導の充実

職員室内では、児童・生徒への学習指導や生活指導についての対話がなされ、報告・連絡・相談・記録の徹底がおおむねできている。

昨年度の課題であった「かすみスリー」・「かすみスタンダード」を学校全体で指導する徹底を図ることについてだが、昨年度に比べ生活指導主任のリーダーシップのもと、少しの改善は見られたが、まだ十分とはいえない現状がある。次年度に向け学校全体で取り組む体制を整える。

④自治活動の推進

各委員会活動では、おおむね児童・生徒の主体性を大切に活動することができた。各委員会において工夫した取組が見られた。各学年の学級活動や小中合同の委員会活動では少し課題が残った。今年度の反省を活かし、次年度さらに推進させていく。

児童会・生徒会活動では、委員会活動および児童会集会・生徒会朝礼の充実を図ることで、児童・生徒が自分事として捉え、学校の一員として責任をもって活動する場面が増えた。

⑤いじめをゆるさない集団作り

「加住小中学校いじめ防止基本方針」のもと、いじめの未然防止、早期発見、早期対応等を行った。また、週一回の全教員で行ういじめ対策委員会では、児童・生徒によるいじめに関するアンケート（6月、11月、2月）、本人や保護者の訴え、児童・生徒からの情報等から「いじめの種」としてあげ、本人への聞き取りとケア、関係児童・生徒への聞き取りと指導について丁寧に確認し、解消に向けて組織的に取り組むことができた。さらに、小学部高学年、中学部においてQ-Uを2度実施し、いじめの早期発見につなげている。

児童会・生徒会が「はちおうじっ子サミット」に参加し、いじめのない学校生活について全児童・生徒が考える機会をつくることができた。

⑥服務事故防止（体罰防止）

管理職による定期的な研修や定期的な発信、そして、個人面談を実施することで、教職員に教職公務員としての高い意識をもたせ、服務事故を起こさないよう、学校全体で取り組んでいる。

⑦地域行事への積極的な参加

学校運営協議会の委員が中心となり、加住ふれあいコミュニティ、夏季休業中にサタデースクールを実施し、多くの児童が参加し、数名の中学生がお手伝いに参加した。青少年対策加住地区委員会主催のクリーンデーでは、生徒会役員の生徒を中心に多くの生徒が参加した。また、少数ではあるが、小学部の児童も参加することができた。次年度は、さらに多くの児童・生徒が参加できるように工夫した取組を行っていく。

(2) 学力向上 80%

①授業改善

管理職による授業観察の際には略案を作成し、授業後に振り返りを行うことで授業改善に努めることができた。さらに、教員相互で授業の参観を行った。

今年度も1時間の授業におけるめあてを明確にし、めあてにせまる主体的・対話的で深い学びの授業を行えるように努めた。

教員一人一人に年間の指導者をつけ、1回以上指導者の先生から指導をしていただき、授業改善につなげた。

児童・生徒による授業アンケートでは、授業内容に関しての肯定的意見が小学部では約9割、中学部では約8割であった。

今年度より、高学年の教科担任制を実施し、教員の教科の専門性を高めながら、授業を実施した。

小学部6年生では、市の学力調査の結果からあきらかに向上した成果を得られた。

②家庭学習の定着

アンケート結果および教員による振り返りを行った。小学部の児童の実態を把握し、担任や教科担当が宿題等を工夫することで、小学部の約9割の児童が毎日家庭学習を行っている。中学部では、生徒の実態を把握し、各教科担当の教員が生徒に合わせた課題を考え、また、学習計画表の活用や補習授業を利用する等の取組を行ってきたが、約5割の生徒が家庭学習を行っている結果にとどまった。次年度に向け、中学部においても生徒の家庭学習が定着できるように努めていく。

③校内研究の推進、小教研・中教研の積極的な活用

研究主任を中心として、今年度の校内研究テーマである「学びに向かう力、人間性等の涵養～個別最適な学びを実現する指導・支援の工夫～」を指導案計画からグループごとに検討し、研究授業に臨み、外部の先生を講師に招き、学びを深めた。

小教研・中教研での公開授業や学んだ内容を実際に自らの授業で行うなど、積極的に活用できた。

④自習教室・補習教室の充実

放課後の学習教室や夏季休業中の学習教室を小学部、中学部それぞれで設定し、児童・生徒が意欲的に学べるように取り組んだ。小学部では、算数少人数担当の教員が中心となり、児童が参加しやすい学習教室を行った。中学部では生徒会が学習を呼びかけるなど工夫を行った。さらに参加する児童・生徒が少しでも多くなるように工夫して取り組んでいく。

中学部においては、定期考査一週間前に自習教室を開き、定期考査への意識を高め、日頃の学習の必要性を感じさせることができた。

(3) 小中学校の一体化 90%

①小中一貫校の教職員としての意識

今年度は新たに小学部1年生から中学部3年生による学習発表会を実施し、児童・生徒、教職員が協働して取り組んだことにより、意識を高めることができた。

②校内分掌の一体化の推進

小学部5、6年生の家庭科、6年生の英語科において中学部の教員による乗り入れ授業を1年間通して実施することができた。また、国語科、社会科、体育科、音楽科、算数・数学科において、小学部の教員と中学部の教員が学び合う姿が見られた。

児童会と生徒会が合同で行う中央委員会を設置し、小学部の児童と中学部の生徒の連携を図ることで自治力を高め、リーダー性や社会性を養うことができた。

今年度は、昨年度の反省を生かし、校内分掌組織体制を大きく変えるとともに、教員配置や会議の設定等を熟考して学校をスタートさせた。また、教職員が対話を重ね、情報を共有しながら進めることを意識して取り組むことができた。

(4) GIGAスクール構想 70%

毎週金曜日の朝の時間を全校児童・生徒によるGIGAの時間とし、授業においてスムーズに活用できるように活用能力を高めた。さらに、1年間を通して、一人一人の活用能力を把握することができた。

昨年度、児童・生徒による授業アンケートにおいて、ICT機器およびタブレットの活用についての肯定的意見が50%であった。ICT機器およびタブレットの活用を学校の課題とし、今年度、教育目標の大きな柱とし、また、校務分掌に位置づけ、学校全体で取り組んできた。今年度は、肯定的意見が小学部では80%、中学部では60%の結果が得られた。次年度も継続して学校全体で取り組んでいく。